

水くゝる

市川 浩
いちかは ひろし

千早ふる神代も聞かず龍田河からくれなみに水くゝるとは

在原業平朝臣

この歌は古今集五秋下二九四の他に伊勢物語百六、小倉百人一首第十七にもある有名な歌なるが、最後の「水くゝる」は「龍田河の水に浮かぶ紅葉の素晴らしい紅色にくゝり染めになつてゐる」とせらるゝが、何ゆゑ「神代も聞かず」なりや、今一つ腑に落ちずぬたり。偶々江戸時代末期の國學者尾崎雅嘉(寶曆五年¹⁷⁵⁵文政十年¹⁸²⁷)の著「百人一首一夕話」を講讀中、この歌に當りて見るに「古今集秋下二條の後の春宮のみやすんどころと申しける時、御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にて詠めるとあり」と記す。實は先年伊勢物語講讀の折、同書百六に「昔、をとこ、親王たちの逍遙し給ふ所にまうでて、龍田河のほとりにて」の詞書の後にこの歌の載るに逢へりけるも、件の疑問解けずにてありき。

今回古今集の詞書に接して惟ふに、秋は紅葉と共に颱風の季節にてもあり、龍田河も水嵩増して、激流となりて下るの間、川面に浮かぶ紅葉葉を「くゝり染め」の染料を捲きこむが如く、かゝる光景を天下の繪師が御屏風に見事に表現せるこそ前代未聞なれと業平感動をこの歌に託せりと解し得たり。小倉百人一首の撰者定家卿も同じ感動にてやありけむ、嵐吹く三室の山のみぢ葉は龍田の川の錦なりけり
能因法師
をも同じく撰せらる。

颱風19號は猛烈の勢力を維持して十月十二日伊豆半島下田に上陸、大量の雨を降らせ本州を北上、各地に甚大の被害を齎せり。決潰、氾濫せる河川は六十八を數へ、被害は地震による津波を凌ぐと云々。先月九日颱風15號千葉縣に強風による家屋損壞、送電網切斷の災ありて略々一ヶ月後のことにて、風水の害に續き次は地震に備へざるべからず。方丈記に據るに、

養和のころ¹¹⁸¹とか、久しくなりておぼえず。二年が間世中飢渴して、あさましき事侍りき。或は春夏^{あらし}ひでり、或は秋、大風、洪水^{おほみづ}など、よからぬ事どもうち續きて、五穀ことごとくならず。(中略)京のならひ、なにわざにつけても、みな、もとは田舎をこそ頼めるに絶えて上るものなければ、さのみやはみさをもつくりあへむ。念じわびつゝ、さまぐの財物かたはしより捨つるがごとくすれども、更に目見立つる人なし。たまくかふるものは、金を軽くし、粟^{あは}を重くす。(中略)いとあはれなる事も侍りき。さがたき妻、をとこをもちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、まれく得たる食物をも、かれに讓るによりてなり。されば、親子あるものは、定れる事にて、親ぞ先立ちける。(中略)又同じころ(元暦二年¹¹⁸⁵)とかよ、おびたしく大地震振る事侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖^{いは}わかれて谷にまろびいる。(中略)恐れの中に恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覺え侍りしか。

とありて、八百四十餘年前の出来事再現するの感あり。中にも水は萬物の生命に不可缺の物なるも、空（大雨）と海（大潮、津波）の二面より我らを攻め滅ぼさむとする趣あるを今秋二回の颱風は如實に教へたり。災害國中に廣ぐるを憂へ、努々^{ゆめゆめ}油斷する勿れ。只人情往時に變らず、全國より自發^{ボランテイヤ}篤志活動に結實するを目の當たりにし嬉しむ。

（令和元年十月二十日受附）